

# RAILWAY & CINEMA



全国順次公開中

詳しくは <http://www.yami-hikari.com/> をご覧ください。



© 2008 Focus Features LLC. All Rights Reserved.

今回は、ごく最近日本で公開され、評判の良かったメキシコ、アメリカ合作のロードムービー、というよりレールムービー「闇の列車、光の旅」を紹介する。製作されたのは二〇〇九年。この映画で長編劇映画にデビューした日系監督キャリアー・ジョージ・フクナガは、新人監督の登竜門サンダンス映画祭において監督賞を受賞している。

ストーリーは、ホンジュラスより親戚の居るアメリカを目指す少女サイラ（パウリーナ・ガイタン）と中南米からアメリカ西部にかけて実際に存在するギャング団マラ・サルヴァトウルチャの若いメンバー、カスペル（エドガー・フロレス）を中心に展開する。貨物列車の屋根の上に乗る、ホンジュラスからメキシコを経てアメリカへの移住（もちろん不法移民）を目指すサイラ一家は、旅の途中でギャング団のボスに襲われるが、そのボスに恋人を殺されたカスペルに窮地を救われる。しかし、今度はカスペルがギャング団から裏切り者として追われることになり、結果的に同じ列車の屋根に乗って国境を目指すことになる。旅の間に淡い恋心の生まれたこの

## 鉄道と映画 — 30

ホンジュラス、メキシコからアメリカへ——  
中南米の衝撃の真実を映したロードムービー。

Sin Nombre

# 「闇の列車、光の旅」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション（FC）への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

二人は、果たして無事追っ手を逃れ、アメリカにたどり着けるだろうか。

ギャング団への入会の儀式等の映画の始めのシーンは、中南米の貧しさ、希望の無さ、そして激しい暴力を良く描き出しており、ブラジル映画の「シテイ・オブ・ゴッド」を思い起こさせるものがある。このような中南米の社会情勢を背景に、虐げられても訴えることのできない不法移民の旅という重いテーマに、この映画は真正面から取り組んでおり、インディペンデント映画らしく、ハリウッドでは絶対に製作されない新しい社会派映画を誕生させることに成功している。夜間貨物列車に集まってくるアメリカへの移住を目指す人たち、危険な屋根の上の旅、経由地のメキシコでの移住者たちへの投石や当局の取り締まり等のシーンは見事に描かれており、中南米社会の実情に疎い日本人の観客にも、過酷な現実を突きつけてくる迫力がある。ましてやアリゾナ州による移民規制法を巡り世論が現在二分されているアメリカでこの映画が注目を集めているのは当然であろう。

アメリカでも評価の高い「闇の列車、光の旅」は、見応えのある力作であることは間違いないが、手放しに褒められる大傑作というわけではない。まず主演の若い二人の俳優は、一生懸命演じており、大きな欠点は無いが、印象深い演技とは言いがたく、むしろギャングのボスなどの脇役の方が存在感がある。またフクナガは、才能と社会的な感性の豊かな将来大いに期待できる監督であることは間違いない。これは、欠点というより劇映画第一作目という経験の問題かもしれないが、最初に伏線を張つてあるとはいえず、ラスト近くの川を越えてからの電話のシーンは、若干観客に迎合的で安易に流れた感があるように筆者には思えた。脚本の緻密さが増すであろう次回監督作品に大いに期待したい。

映画の半分くらいは、貨物列車とその屋根の上のシーン等であり、それらの場面は、いずれも良く撮れている（サンダンス映画祭撮影賞受賞）。その中でも夜、貨物列車の出発するシーンは、未知の危険な旅に出る不気味な雰囲気が出ており、出色である。鉄道の好きな方、そうでない方を問わず、見た人に貧しい世界の現状を考えさせる映画であり、ご覧になることをお勧めする。